「研究室訪問シリーズ」の成果と課題
―大学博物館と大学教員の連携のかたちをめぐって―

下園　知弥

はじめに

本稿は、西南学院大学博物館が2018年より開始した企画展「研究室訪問シリーズ」の中間報告として著したものである。「研究室訪問シリーズ」[1]は、西南学院大学博物館において大学博物館と大学教員が連携しつつ、大学教員の教育研究内容および私的コレクションについて展示を通じて紹介するというコンセプトで始まった西南学院大学博物館独自のプロジェクトであり、2023年３月現在、四つの展覧会が開催されている。

研究室訪問シリーズは、西南学院大学博物館が抱える教育的・経営的課題の一部を打開しうるものであり、また大学教員・大学博物館の双方にとってメリットがあるため、今後も継続を予定している。しかしその一方で、解決すべき多くの課題を内包しており、今後の継続に際してはそれらの課題を解決していく必要がある。本稿では、いま言及した課題とその解決策について、担当者の一人である筆者の視点から、個人的な反省もふまえつつ考察している。本稿が、同様の課題をいま現在抱えている諸博物館やこれから大学教員との連携を強化していくことを検討している諸博物館にとって、何らか有益な参考情報となれば幸いである。

１．西南学院大学博物館が抱える教育的・経営的課題

2006年５月に西南学院大学の附属施設として開館した西南学院大学博物館は、博物館のカテゴリー[2]としては「大学博物館」に該当する施設である。古くはオックスフォード大学の附属施設であるアシュモレアン博物館にまで遡ることができる大学博物館[3]は、世界各国の大学に設置されており、わが国においても200を超える館の存在が確認されている[4]。それらの経営実態は多様を極めており、学内関係者にのみ開かれている大学博物館から、市民にも常時開放されている大学博物館、各自治体の中枢的な博物館の規模に匹敵する設備・展示空間を持つ大学博物館まで、さまざま存在する。したがって、それらの大学博物館が抱える課題もまた、さまざまであると言わざるを得ない。

とはいえ、日本の大学博物館すべてが共通して抱えていると言い得る問題はいくつか存在する。それはたとえば、登録制度をめぐる問題[5]、収集資料の範囲をめぐる問題[6]、専属の学芸員の雇用をめぐる問題[7]などである。そしてこれらの共通問題の一つに、「学生利用率」も数え入れることができるだろう。

日本における大学博物館拡大のきっかけの一つである文部省学術審議会の報告書「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」[8]以来、地域のなかの学習施設として学内のみならず学外にも開かれていることが大学博物館の経営目標として認識されるようになっているが、大学が在籍する学生の学費によって経営されている教育施設である以上、大学の附属施設である大学博物館もまた、第一に学生をその教育対象として考えるべきであろう[9]。ともすれば、大学博物館の運営には、自らの大学に在籍する学生がどの程度利用しているのかについて統計を取り、利用率向上の戦略を練ることが求められる。

西南学院大学博物館もまた、この種の統計を取っており、毎年の事業計画の参考としている。同館の

運営に関わっている筆者の所感としては、西南学院大学博物館の在校生利用率は、入館無料であるにもかかわらず、決して満足できる水準ではない。2021年度の統計では、年間来館者計3,165名のうち本学学生は709名であった[10]。来館者種別の割合にすれば約22%である。むろん、このデータにはコロナ禍という特殊な状況の影響が大きく反映されているため、単独で評価するべきではない。コロナ禍以前の2018年度の統計では、年間来館者数計9,336名のうち本学学生は2,569名であった[11]。来館者種別の割合にすれば約27%である。両年度の比較からは、年間来館者数には大きな開きがあるものの、在校生利用率についてはそれほど大きな開きがあるわけではない、ということがわかる。他の年度の統計を参照してみても、おおよそ20%台というのが西南学院大学博物館の在校生利用率である。

20%台という数字を多いと見るか少ないと見るかは人によって異なるだろうが、筆者は高い利用率だとは考えていない。というのも、この統計データで本学学生としてカウントされている在校生の多くは、講義や課題によって半ば強制的に来館させられた学生だからである。単位に関係なく自主的・個人的な学習のために来館した在校生は、おそらく全体の10%を切っている、というのが筆者の印象である。10%未満という数字の正否は置いておくにしても、統計に現れている数字ほど在校生が博物館を積極的に利用しているわけではないのは事実であり、その点を加味すれば、やはり西南学院大学博物館の在校生利用率は低いと言わざるを得ない。

西南学院大学博物館が抱えている来館者の問題は在校生利用率だけではない。学内関係者の利用率および関心度の低さもまた、大きな問題である。先の統計データには学内教職員のデータも含まれているが、そちらの数字は、低いというよりも、悲惨である。大学博物館に来館した学内教職員数は2021年度で119名、2018年度で245名であった[12]。来館者種別の割合にすれば、2021年度が約3.7%、2018年度が約2.6%である。むろんこれらの数値が意味するところは、500人を超える学内教職員[13]のうち100人から200人程度が毎年博物館にやってきているということではない。より少ない数の博物館に関心のある学内教職員、つまり特定のリピーターが何度も来館してようやく100から200程度のカウントになっているのである。実際、体感的にも、学内教職員が業務以外で西南学院大学博物館を訪れることは滅多になく、館内で目にするのは同じ特定の教職員の姿ばかりである。

この問題の根の深いところは、大学博物館の建物は福岡県指定文化財に指定されており、学院を象徴する建物として広報誌等を通じて盛んにPRされているにもかかわらず――つまり、教職員のほぼ全員がその存在や重要性自体は認識しているにもかかわらず――、その建物の中すなわち博物館の展示や教育事業については大半が関心を持っておらず、それで良いと考えているというところである。

在校生利用率にしても、教職員利用率にしても、西南学院大学博物館は決して高い水準にあるとは言えない。その根本的な理由について推測するに、それはおそらく「自分には関係の無い施設」だと両者に認識されているからだと思われる。すなわち、多くの在校生にとっては、単位に関わらないのであれば無理に訪問しなくても卒業できる施設として認識されており、多くの学内教職員にとっては、その施設を利用して学習しなくても業務に支障が無い施設として認識されているから、利用率が低いのではないだろうか。であるとすれば、「関係を作り出す」ことが解決の鍵となるように思われる。

「関係を作り出す」と言っても、在校生に対しては博物館へ来館し学習しなければ卒業できない制度にして、学内教職員に対しては博物館の見学を業務に組み込むことを強制する、という意味ではない。ここで筆者が企図しているのは、学生・教職員が単位・業務の関わり抜きにしても「関係させられてしまう」ような企画を考える、ということである。そしてこの「関係させられてしまう」企画として、他の展覧会企画よりも大きな可能性を秘めているのが「研究室訪問シリーズ」であり、実際に一定程度の成果を残してきたと筆者は考えている。

2．研究室訪問シリーズの基本コンセプト

そもそも「研究室訪問シリーズ」は何を目指して始まったプロジェクトなのか。この問いに対しては、研究室訪問シリーズの初回にあたる「地下墓地カタコンベの世界」の展覧会リーフレット[14]において、その答えが簡潔に記されている。

> 今回の新企画「研究室訪問シリーズ」は、西南学院大学の先生方が研究の合間にコツコツ集めてこられた貴重な「個人コレクション」を、博物館スタッフと協力して一挙公開するものです。普段は大学の教室や研究論文でしか知ることのできない先生方の研究をわかりやすく紹介します。大学における社会の窓口として、大学と地域社会の皆様とをつなぐ場となる大学博物館の使命を果たす企画です。[15]

この文言から読み取れる研究室訪問シリーズの当初のコンセプトは、大学教員の個人コレクションを通じて教員の研究をわかりやすく紹介することであり、主な対象として地域社会すなわち学外の市民を想定している、というものである。このコンセプトは、大学の研究のなかで生産され続けてゆく学術標本を広く社会の教育に役立てることを提言した「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」に忠実なものであり、時代の要請に対する西南学院大学博物館なりの応答であると言える。

上記のコンセプトは現在に至るまで守られ続けている研究室訪問シリーズの重要な柱であるが、第４回を迎えた現在では、上記の文言の中で明文化されていなかった要素も「後付け」されている。それは、展示品を個人コレクションに限らないこと、そして学外のみならず学内の学生・教職員も主な対象とすることである。両要素は、実のところ第１回から既に内包されていた要素ではあるが、シリーズの継続性や先に述べた来館者問題の解決のために、当時よりも現在の方がより強く明確に意識されるようになっている。その意味で「後付け」である。

よって、後付けも含めた研究室訪問シリーズの基本コンセプトを箇条書きにすると、下記の通りとなる。

①大学教員の個人コレクションおよび研究関連資料を紹介すること
②個人コレクションおよび研究関連資料によって大学教員の研究をわかりやすく伝えること
③「学外の市民」と「学内の学生・教職員」の双方を主な対象とすること

注意したいのは、上記三つの要素は、いずれかではなくすべてを満たすことが企画の条件となっている、という点である。たとえば、以前企画案として、とある教員の「切符コレクションの紹介」が挙げられたことがある。この企画は上述の基本コンセプトの①を（あるいは③も）満たすものであったが、②には明らかに該当しなかった。なぜならば、その教員は切符ないしそれにまつわる文化の研究者ではなく、切符はあくまでも趣味的なコレクションだったからである。そのため、「大学教員の切符コレクション展」が研究室訪問シリーズとして実現することはなかった。

シリーズ継続のために今後いくつかの要素（条件）が緩和されてゆく可能性はあるかもしれないが、現状は上記三つの要素すべてを満たすことが研究室訪問シリーズの条件となっている。

3．各回の構成と連携のかたち

先述の基本コンセプトのもと、現在までに４回の研究室訪問シリーズが西南学院大学博物館で開催されている。この４回の展覧会は、すべて異なる学部・学科の教員に連携・協力を依頼して実現したものである[16]。さらに、連携教員だけではなく、連携のかたちについても、４回すべてが異なるものとなっている。以下、各回の概要と連携のかたちについて概説する。

①研究室訪問シリーズⅠ（2018年度）

「地下墓地 カタコンベの世界」（図１・２）

連携教員：山田　　順（国際文化学部国際文化学科准教授）

担　　当：内島美奈子（西南学院大学博物館学芸員）

会　　期：2018年４月２日㈪～６月30日㈯

会　　場：西南学院大学博物館１階特別展示室

２階講堂

協　　力：山田順研究室

南山大学教皇庁認可神学部図書館

【展示概要】

西南学院大学の先生方の貴重な個人コレクションを展示する研究室訪問シリーズ第１回目。本展覧会では、国際文化学部の山田順准教授のカタコンベ研究に関する展示をおこないます。カタコンベの再発見に貢献した考古学者たちの挑戦とその成果に注目しながら、初期キリスト教考古学の成立と発展、そして最新の研究成果をご覧いただけます。

（西南学院大学博物館ホームページより引用）

【連携内容】

本展覧会では、連携教員が展示資料の候補を挙げ、博物館職員が展示構成を考える、という体制を取った。一部資料は連携教員がコネクションを持っている図書館から、連携教員の仲介を経て借用した。

キャプションや展示パネル、展覧会リーフレットなどの関連製作物については、博物館職員が執筆・デザインし、連携教員がチェック（アドバイス）を行う、というかたちで製作した。

講演会やワークショップのような関連事業は企画されなかったが、会期終了後に南山大学人類学博物館で展示パネルを再利用した企画展が開催され、そちらの展覧会では連携教員による講演会が開催された[17]。

②研究室訪問シリーズⅡ（2019年度）

「ねこ学への招待」（図３・４）

連携教員：山根　明弘（人間科学部社会福祉学科教授）

担　　当：下園　知弥（西南学院大学博物館学芸員）

会　　期：2019年４月１日㈪～６月29日㈯

会　　場：西南学院大学博物館１階特別展示室

２階講堂

協　　力：山根明弘研究室　西南学院大学図書館

書肆 吾輩堂　長崎の町ねこ調査隊塾

一般社団法人博多ねこ99ネットワーク

【展示概要】

わたしたちの身近にいる、かわいくてふしぎな生き物、ねこ。ねことはどんな生き物なのか、またこの生き物とわたしたち人間は、今までどんな関係を築いてきたのか。 本展では、ねこの生態を明らかにする学問「ねこ学」（Cat Studies）を通じて、わたしたちの知らないねこの世界へ、皆さんを招待します！

（西南学院大学博物館ホームページより引用）

【連携内容】

本展覧会では、展示空間を二つの区画に分けて、一方を博物館職員が構成し、他方を連携教員が構成するという体制を取った。また、連携教員のみならず、連携教員と繋がりのある関連書店・団体からも、資料借用やデータ提供を受けた。

キャプションや展示パネル、展覧会リーフレットなどの関連製作物については、連携教員と博物館職員が分担で執筆し、デザインは博物館職員がおこなった。

関連事業については、連携教員によるトークイベントおよび学内の学生団体によるミュージアム・コンサートを開催した。

③研究室訪問シリーズⅢ（2020年度）

「黒木重雄：絵を描くという生き方」（図５・６）

連携教員：黒木　重雄（人間科学部児童教育学科教授）

担　　当：山尾　彩香（西南学院大学博物館学芸研究員）

下園　知弥（西南学院大学博物館学芸員）

会　　期：2020年10月３日㈯～12月18日㈮

会　　場：西南学院大学博物館１階特別展示室

２階講堂

西南コミュニティーセンター１階ホワイエ

協　　力：黒木重雄研究室

図１　研究室訪問シリーズⅠ 展覧会リーフレット

図２　研究室訪問シリーズⅠ 展示室写真

図３　研究室訪問シリーズⅡ 展覧会リーフレット

図４　研究室訪問シリーズⅡ 展示室写真

図５　研究室訪問シリーズⅢ 展覧会チラシ

図６　研究室訪問シリーズⅢ 展示室写真

図７　研究室訪問シリーズⅣ 展覧会チラシ

図８　研究室訪問シリーズⅣ 調査資料写真

【展示概要】

本展覧会では、本学人間科学部児童教育学科の黒木重雄教授が幼少の頃より描き続けてきた絵画作品とともに、本学での児童教育のために作成した教材や学生の成果物を展示します。第20回岡本太郎現代芸術賞展で特別賞を受賞した《One day》(2014)のほか、福岡未発表作品を一挙公開。

（西南学院大学博物館ホームページより引用）

【連携内容】

本展覧会では、展示空間のすべてを連携教員がプロデュースし、博物館職員は展示用具や業者の手配といった実現のためのサポートを担当した。展示資料は連携教員の作品およびゼミ生の製作物であり、すべて連携教員から提供を受けた。

キャプションや展示パネル、展覧会リーフレットなどの関連製作物については、基本的に連携教員が原稿を執筆し、博物館職員が連携教員監修のもとデザインするというかたちで製作した。

関連事業については、当初は連携教員によるアーティストトークを企画していたが、コロナ禍のため企画段階で断念した。

④研究室訪問シリーズⅣ（2022年度）

「学院史のなかの神学部：成立と歩み、そして現在」（図７・８）

連携教員：神学部教員

担　　当：下園　知弥（西南学院大学博物館学芸員）

　　宮川　由衣（西南学院史資料センターアーキビスト）

主　　催：西南学院大学博物館 西南学院史資料センター

会　　期：2023年３月１日㈬～５月22日㈪

会　　場：西南学院大学博物館１階常設展示室

協　　力：西南学院大学神学部 西南学院大学図書館

【展示概要】

西南学院大学神学部の源流は、学院創立の1916（大正５）年よりも以前、1907（明治40）年の福岡バプテスト神学校の設立に求めることができます。設立以来、神学部は大名、西新、干隈とキャンパス移転を繰り返し、2023（令和５）年現在は西新キャンパスで他の学部と共に教育・研究の日々を過ごしています。100年以上にわたるこの長い歴史の中で、多くの問題に直面しながら、神学部は牧会や教育の現場でキリスト教について語る人々を育て世に送り出してきました。本展覧会では、その歴史の一端と現在の神学部教育について、さまざまな資料と共に紹介します。

（西南学院大学博物館ホームページより引用）

【連携内容】

本展覧会では、一人の教員ではなく学部単位で連携を行なった。展示空間は二つの区画に分けて、一方を博物館職員・学院史資料センター職員による学院史資料展示コーナーとし、もう一方を連携教員による資料紹介コーナーとした。

展示空間および各種製作物のデザインはすべて博物館職員が担当し、連携教員には一部の資料選定・原稿執筆・データ提供を依頼するという体制を取った。

関連事業については、コロナ禍の影響と教員の負担を考慮し、企画しなかった。ただし本企画展との親和性が高いテーマ展示・ワークショップを会期中に開催することで、充実度の向上を図った。

以上が研究室訪問シリーズ全４回の概要である。先に記したように、連携内容はすべて異なっているが、そこにはさまざまな要因・企図が存している。たとえば、第２回と第３回では展示構成・資料選定の一部ないしすべてを連携教員に委ねたが、これは両教員が博物館・美術館の展示に精通していたという事情に拠る。また、第４回では一人の教員ではなく学部全体に協力を依頼しているが、これは連携に際しての教員側の負担を減らしつつ資料的なハードルも下げる（充実した私的コレクションを有していなければ連携が実現しないという前提条件を崩す）試みであり、第３回までの反省をふまえてのものであった。

元より、研究室訪問シリーズはこのような多様性を前提にして構想された企画ではなかった。しかし回を追うにつれて、連携教員のバックグラウンドの多様性に応じて連携のかたちも柔軟に変えていった

方がより魅力的な展覧会にできるということに気付き、いかにして連携教員のバックグラウンドから魅力的な展示の素材を引き出すかを強く意識するようになった結果、「多様な連携のかたち」を推進するシリーズとなっていったのである。

４．研究室訪問シリーズの成果

筆者の考えでは、研究室訪問シリーズの成果は次の三つである。第一に、西南学院大学博物館の学内連携の範囲・方法を拡大できたこと。第二に、展示企画のヴァリエーションを拡大できたこと。第三に、他の展覧会企画では呼び込めなかった人々にも来館してもらえたこと。これら三つの成果について、それぞれ詳細を見ていきたい。

【第一の成果：学内連携の拡大】

従来、西南学院大学博物館と連携を取っている教職員は、業務上の関係者がほとんどであった。すなわち、大学教員を兼任している館長、博物館学芸員課程主任、講義に博物館見学を取り入れている教員、学院史資料の管理や市民講座の企画を担当している職員などである。展覧会企画に博物館所属ではない大学教職員が中心的な立ち位置で関わっていた前例は無く、展覧会はいずれも博物館職員主導の企画であった。

しかし、研究室訪問シリーズが始まったことで、博物館に所属していない大学教員も展覧会企画に主体的に関わることができるようになった。これは博物館側だけでなく大学教員側にもメリットがある変化である。なぜならば、広く市民に解放された空間で「モノ」を見せながら自身の研究を紹介することは、博物館やギャラリーといった「ハコ」があって初めて成立する方法だからである。当然、ほとんどの大学教員はそういったハコと業務上の関わりを持たない。そのため、研究室訪問シリーズには、大学の中のハコ（＝大学博物館）にこれまで関わりを持たなかった、あるいは持てなかった教員が新たな教育方法にチャレンジする機会を設ける、という意義もあるのである。

【第二の成果：展示ヴァリエーションの拡大】

先に教員側のメリットを述べたが、博物館側のメリットも当然ある。その一つは、展示ヴァリエーションの拡大である。

言うまでもなく、各々の博物館の展示は「所蔵資料」と「職員の専門性」に大きく依存する。その制約を突破するための方法はいくつもあるが――たとえば資料借用や連携展示企画など――、その多くは「多額の予算」があって初めて可能となるものである。それに対して研究室訪問シリーズは、同じ大学内の教員という最もコンタクトの取りやすい「ヒト」とそのヒトが持っている「モノ」を博物館の経営資源[18]として取り入れることで、多額の予算がなくても新しい資料・新しい専門分野の展示を作り出す可能性を秘めているのである[19]。

大学附属の施設として設置されている大学博物館は、いわゆる中小規模博物館であることが多く、予算も規模に見合ったものとなっている。予算が少なければ経営資源も少ないということになり、それが展示のヴァリエーションを狭める主因となる。展示のヴァリエーションが狭まれば学内外の関心は低くなり、そうなると予算の減額が検討される。そこで予算の減額が決定されれば、展示の選択肢はより狭まって、人を呼ぶことがますます難しくなる。この悪循環は多くの博物館が課題として抱えているものと思われるが、新たな資料・専門分野の展示という可能性を秘めた大学教員との連携は、この悪循環を断ち切る一つのきっかけになり得る。

実際、西南学院大学博物館は学芸員１名（2014年度以降は学芸員に加えて学芸員を補助する学芸研究員１～２名）という状況でこれまで運営されてきたが、この人員的な制約が展示のヴァリエーションを狭めてきた事実は否めない[20]。しかし研究室訪問シリーズは、その人員的な制約を一時的に取り払うことで、博物館職員だけでは資料の点からも専門性の点からも決して立案・実行できなかった展覧会を複数実現することに成功している。これが第二の成果

である。

【第三の成果：来館者の拡大】

さらに博物館側のメリットとして、来館者の拡大が挙げられる。ここで言う「拡大」は、人数の増加のみならず、これまで博物館に来てもらえなかった層にも来てもらえるようになるという変化も含意している。事実、来館者統計のデータには、研究室訪問シリーズに関するいくつかの興味深い傾向が現れている[21]。

図９は2017年度、図10は2018年度の月別来館者統計データである。前者は研究室訪問シリーズがまだ開催されていない年度であり、後者は同シリーズの第１回「地下墓地 カタコンベの世界」が開催された年度である。同展覧会の会期中（４月～６月）の合計値に注目すると、研究室訪問シリーズが開催された2018年度の方がやや多くなっていることがわかる。月別に見ると、４月の来館者数は研究室訪問シリーズの開催された2018年が圧倒的に多くなっている。推測するに、研究室訪問シリーズというこれまでにないタイプの展覧会が開催されたことで、会期の序盤にこれまで西南学院大学博物館に来なかった層を含む多くの来館者が訪れたため、ここまでの差が出たのだろう。それに対して５月は同水準、６月は2017年度を下回っているのは、研究室訪問シリーズに興味があって新規に来館した層が４月におおよそ来てしまったからではないかと思われる。なお、2017年度は６月から特別展が開催されているため、６月については会期終了月である2018年度よりも会期開始月である2017年度の方が来館者数が多いのは当然の結果であると言える。

2018年度のデータについては、研究室訪問シリーズが開催されていた月とそれ以外の月を比較してみても、興味深い事実が示唆されている。一年の中で特に来館者数が多かった月（月間400人以上）は、４月～５月と11月～12月であるが、前者は研究室訪問シリーズの会期中であり、後者はこの年度で最も規模の大きな展覧会「キリシタン：日本とキリスト教の469年」の会期中であった。しかし実は、この年度には７月～10月に企画展「東方キリスト教との出会い」が、１月～３月に企画展「宗教改革と印刷革命」が開催されており、いずれの企画展も研究室訪問シリーズと同等の規模・予算で実施されていたのである。したがって、この年度の来館者統計から読み取れるのは、研究室訪問シリーズは同規模・同予算の展覧会よりも「人を多く呼べる」展覧会企画だという事実である。

研究室訪問シリーズがいかに「人を多く呼べる」かについては、2019年度のデータ（図11）がより顕著である。この年度は同シリーズの第２回「ねこ学への招待」が開催されており、会期は前年度の同シリーズと同じく４月～６月であった。そしてこの年度に最も多く来館者が訪れていた期間も４月～６月であった。同年度の他の展覧会としては、７月～10月に特別展「明治日本とキリスト教：蒔かれた種」、11月～１月に特別展「聖母の美：諸教会におけるマリア神学とその芸術的展開」、２月～４月に企画展「文化財とともに生きていく」が開催されており、いずれも「ねこ学への招待」と同等ないしそれ以上の規模・予算で実施された展覧会であったが、来館者数という点では研究室訪問シリーズには全く及ばなかった。実は「ねこ学への招待」は、この年度だけでなく、この10年間（2013～2022年度）で最も来館者数の多かった展覧会でもあり、研究室訪問シリーズの可能性を数字として実証した回であった。

研究室訪問シリーズの来館者統計から読み取れるその他の特徴として、「学内関係者を惹きつける力が強い」という点も挙げられる。研究室訪問シリーズが開催されていない2017年度と開催された2018年度・2019年度の来館者数を比較してみると、学外を含む全体の来館者数は2017年度が最も多かったにもかかわらず、学内の来館者数は2018年度と2019年度が共に2017年度を上回っている。その要因の一つは、研究室訪問シリーズの会期中、特に４月に2017年度以上の学内関係者が来館したことである。要するに、研究室訪問シリーズは、第１回の展覧会リーフレットに明記されていた当初のコンセプトとは裏腹に、（他の展覧会と比較して）地域の市民よりも

■2017年度　月別来館者統計

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数		25	27	26	25	20	26	26	27	22	23	24	27	298
学内	教職員	83	15	17	20	3	0	21	22	19	2	28	4	234
	本学学生	194	420	352	324	41	105	236	160	136	66	51	173	2,258
	学内小計	277	435	369	344	44	105	257	182	155	68	79	177	2,492
学外	大人(一般)	272	364	452	649	349	510	566	501	335	355	123	331	4,807
	他大学生	5	64	53	39	4	14	5	23	18	8	5	8	246
	高校生	2	105	20	539	147	115	510	6	265	7	1	40	1,757
	中学生	253	5	0	38	7	142	0	0	151	4	0	7	607
	小学生	7	13	156	113	51	12	1	19	26	11	6	7	422
	幼児	19	15	12	14	8	12	9	15	11	7	3	2	127
	学外小計	558	566	693	1,392	566	805	1,091	564	806	392	138	395	7,966
海外居住者		37	89	37	152	36	4	27	41	31	133	25	43	655
男女比	男　性	149	199	261	263	186	104	115	141	142	107	52	102	1,821
	女　性	150	144	221	207	232	120	264	192	135	138	41	76	1,920
	不　明	536	658	580	1,266	192	686	969	413	684	215	124	394	6,717
合　計		835	1,001	1,062	1,736	610	910	1,348	746	961	460	217	572	10,458

図９　2017年月別度来館者（『西南学院大学博物館年報第10号 2017』より転載）

■2018年度　月別来館者統計

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数		25	27	26	27	21	25	22	25	21	21	24	25	289
学内	教職員	98	12	10	12	13	6	17	44	10	12	6	5	245
	本学学生	329	400	235	92	54	196	207	426	440	152	27	11	2,569
	学内小計	427	412	245	104	67	202	224	470	450	164	33	16	2,814
学外	大人(一般)	351	420	495	391	319	288	404	555	523	236	301	331	4,614
	他大学生	29	46	21	7	4	20	12	25	0	3	7	18	192
	高校生	3	1	142	80	179	0	256	2	2	15	17	2	699
	中学生	209	4	30	2	17	3	0	2	2	1	5	2	277
	小学生	16	121	62	56	89	35	13	15	30	3	10	21	471
	幼児	18	12	32	9	20	8	19	27	37	39	29	19	269
	学外小計	626	604	782	545	628	354	704	626	594	297	369	393	6,522
海外居住者		14	19	46	95	104	20	13	108	23	103	60	42	647
男女比	男　性	224	248	279	239	197	192	315	305	240	121	136	145	2,641
	女　性	198	234	324	216	271	226	294	319	199	119	145	164	2,709
	不　明	631	534	424	194	227	138	319	472	605	221	121	100	3,986
合　計		1,053	1,016	1,027	649	695	556	928	1,096	1,044	461	402	409	9,336

図10　2018年度月別来館者統計（西南学院大学博物館年報第11号 2018』より転載）

■2019年度　月別来館者統計

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数		26	27	25	26	21	25	24	26	21	18	24	25	288
学内	教職員	97	22	10	14	10	30	18	24	30	6	0	3	264
	本学学生	558	391	390	493	13	149	60	183	145	91	9	27	2,509
	学内小計	655	413	400	507	23	179	78	207	175	97	9	30	2,773
学外	大人(一般)	429	971	598	388	278	294	569	487	159	196	145	104	4,618
	他大学生	5	9	15	40	33	19	14	14	3	0	6	8	166
	高校生	8	21	15	1	198	3	25	7	163	2	9	0	452
	中学生	4	9	2	1	12	0	3	1	0	0	1	1	34
	小学生	37	99	24	18	41	31	12	6	2	6	9	6	291
	幼児	35	27	15	12	18	8	2	4	5	3	9	2	140
	学外小計	518	1,136	669	460	580	355	625	519	332	207	179	121	5,701
海外居住者		25	22	56	112	15	25	3	6	4	58	9	0	335
男女比	男　性	253	348	217	211	186	190	175	129	118	112	87	72	2,098
	女　性	336	434	386	177	237	170	162	172	101	114	62	68	2,419
	不　明	584	767	466	579	180	174	366	425	288	78	39	11	3,957
合　計		1,173	1,549	1,069	967	603	534	703	726	507	304	188	151	8,474

図11　2019年度月別来館者統計（西南学院大学博物館年報第12号 2019』より転載）

学内の学生・教職員に訴える力の方が大きい、という結果になったのである。しかしこの結果が全く意外なものであったかと言われれば、そうではない、というのが筆者の感想である。

研究室訪問シリーズの基本コンセプトは、大学教員の研究を展示というかたちでわかりやすく示し伝えることである。この種の展示を見たいと思うのは、研究内容に興味がある人か、教員個人に興味がある人であろう。ではどのような人が「研究内容」や「教員個人」に興味があるかと言えば、まずもってそれは、研究の世界に身を置く人々や、その教員についてあらかじめ個人的に知っている人々である。そしてこの条件に最も合致するのは、大学の関係者、特に同じ学内の学生・教職員であろう。学内でその教員と話したことはあるが何を研究しているのかまでは詳しく知らなかった教職員や、その教員の講義の履修を検討しているものの人となりや研究を詳しく知らないため不安がある学生、あるいはすでに講義を履修していてその分野の研究ないし教員個人の魅力を知っている学生、等々。こういった人々が、学内関係者として、連携教員の展示を観に来るわけである。

個人的に、研究室訪問シリーズの最大の成果は、このような「学内関係者」の範囲を拡大できた点にあると考えている。すなわち、これまで大学博物館と密接な繋がりを持っていなかった大学教員を博物館の事業に巻き込むことで、その教員と繋がりを持っている関係者、とりわけ学内関係者を展覧会の関係者にしてしまう。そのような効果が研究室訪問シリーズにはあるのである。その効果は他の展覧会事業では得難いものであり、今後自覚的に活用していけば、これまでの課題であった学内の学生・教職員の利用率の更なる拡大を狙えるはずである。

5．研究室訪問シリーズの課題

さまざまな成果を出している研究室訪問シリーズであるが、課題も多く残されている。ここでは筆者がこれまでの連携で気づいた三つの問題について書き留めておきたい。

【連携予算の問題】

先に「第二の成果」として、予算が少なくても展示のヴァリエーションを増やすことができるのが研究室訪問室シリーズの強みだと説明した。実際、これまでの研究室訪問シリーズは比較的低予算で実施されており、それにもかかわらず他の企画展と同等以上の来館者を呼ぶことに成功している。しかし「低予算」の是非については、今後しっかりと検討していく必要があるだろう。というのも、この研究室訪問シリーズは連携教員に対して十分な報酬を払うことができていないと筆者は考えているからである。

研究室訪問シリーズにおける連携教員の報酬は、いまのところ、原稿執筆謝礼や展覧会協力費（写真データの提供など些細なものに関する）のようなかたちでしか発生していない。西南学院大学博物館の展覧会は基本的に博物館職員がプロデュースするものであり、博物館職員ではない大学教員が展覧会事業に中心的な立ち位置で関わるのはイレギュラーな事態であるため、連携報酬がそもそも予算化されていないのである。そのような状況で、一部の協力内容だけを評価して報酬を支払うということは、実際の協力内容・費やされた時間に対して微々たる報酬しか支払わないことと同義である。これはまったくフェアではない状況であるため、今後も研究室訪問シリーズを継続していくためには、きちんと予算化する必要があるだろう。

しかし報酬額の設定に関しては、考えるべき点が多々ある。「一つの展覧会に中心的な立ち位置で協力する」という、学内で他に例がない立場の報酬について、何を基準にその金額を設定するのか。大学の附属施設である大学博物館の事業に協力するのは、大学教員の教務の一環と見做すべきか、それとも教務外の個人的な活動と見做すべきか。報酬にまつわる問題は複雑であり、大学博物館の一存で決めることはできない。したがって、すぐさま解決できる問題ではないが、それでもやはり、「教員をタダ働きさせる企画」と学内教職員に認知されないため

にも、正当な報酬を連携教員へ支払うことができる予算作りは喫緊の課題であると言える。

【連携教員の負担の問題】

予算の問題をクリアできたとしても、連携教員にどこまで協力してもらうかという点は、博物館側が常に考えておかなければならない問題である。当然ながら、協力内容が増えれば増えるほど、連携教員の負担は増すことになる。連携教員が博物館からの依頼以外にも多くの教務や研究プロジェクトを抱えている事実を忘れず、そちらの犠牲を強いない範囲で協力を依頼するのが望ましい連携のあり方であろう。

とはいえ難しいのは、単純な連携内容・業務量だけで連携教員の負担を推し量ることはできない、というところである。博物館の展示について豊富な知識・経験を持っている教員であれば、展示室全体のプロデュースでさえそれほど負担にはならないかもしれないが、ほとんど知識・経験を持っていない教員の場合には、展示ケース一つ分の担当であっても困難に感じるかもしれない。

したがって、博物館側の希望だけで依頼内容を決めてしまうのは、教員の負担という点から考えても問題があるため、どのような依頼内容が妥当であるかは連携教員と打ち合わせながらその都度決めていく必要があるだろう。

【情報共有の問題】

先に述べた連携教員側の負担という問題に対しては、「連携教員の数を増やして一人当たりの負担を減らす」という対策が考えられる。そして実際に、第４回の「学院史のなかの神学部：成立と歩み、そして現在」では、神学部教員５名と連携して展覧会を準備した。担当者である筆者の所感としては、連携教員の負担は適切に減らすことができたが、今度は「情報共有」についての課題が生じた回であった。

博物館職員ではない大学教員と連携して研究室訪問シリーズという展覧会を作り上げるということは、連携教員と研究室訪問シリーズの理念を共有し、それぞれが出しうるリソースについて情報を出し合って協議し、展示空間を組み立てていく必要がある、ということである。これは連携教員が増えようと各々の教員に対して必要なプロセスであるため、５人と連携するならば５人それぞれに研究室訪問シリーズの理念を説明し、それに相応しい資料の選定等をしてもらう必要がある。したがって、連携教員の数が増えれば増えるほど情報共有のための労力が増すのである。

実際、「学院史のなかの神学部：成立と歩み、そして現在」で最も難航したのは展示資料の選定であった。というのも、連携を打診した当初は連携教員の多くから「博物館で展示できるようなものは無い」という回答を受けたからである。しかしその後、研究室訪問シリーズの趣旨について改めて説明したところ、「これならば出せるかもしれない」と資料を提示してもらうことができた。

このような事態になってしまったのは、ひとえに、担当者である筆者が研究室訪問シリーズの趣旨について十分に説明しないまま協力を依頼してしまったからである。ではなぜそのようなことをしてしまったのかと言えば、同じく筆者が担当した第２回と第３回の連携教員が博物館・美術館の展示に精通していたため、言葉足らずでも正確にこちらの意図を読み取り協力してもらっていたからである。しかし第４回の連携相手である神学部は、博物館・美術館の展示には馴染みのない学部であったため、同じ方法での連携は成立しなかったのである。

資料選定後も情報共有に関する問題は続いた。選定資料に付けるキャプションや教員紹介文の入稿およびその校正に際して、５名の教員とメール（時には対面）のやりとりが続いたが、博物館側の担当者は筆者一人であったため、情報共有は容易ではなかった。立ち位置としては連携教員と委託業者（造作業者および印刷業者）の仲介をおこなう役回りでもあったため、連携教員５名に加えて業者複数名とのやりとりもあり、通常の企画展準備よりもはるかに多くの連絡をおこなうことになってしまった。

第４回は連携教員側の負担を減らすことを意識し

つつ企画したものであったが、その結果として博物館側の負担が増えすぎるという反動があった。これは大きな反省点である。また、研究室訪問シリーズの魅力を最大限引き出すためには連携教員との密な情報共有が前提となるが、連携教員の数が増え過ぎればその前提さえ崩れてしまう。この危険性についても連携担当者は意識しておくべきである。連携教員の人数に幅を持たせること自体は選択肢としてあっても良いが、今後は理想のバランスを模索していく必要があるだろう。

おわりに

本論文では、西南学院大学博物館独自の展覧会プロジェクトである「研究室訪問シリーズ」について、その意義ならびに成果を分析し、今後の課題を明らかにした。成果も課題も共に多く存在し、まだまだ可能性を秘めているプロジェクトであるが、大学博物館に課された今日的課題、すなわち社会に開かれた窓口として大学と市民を繋ぎ、かつ学内の学生・教職員の教育研究に役立てる、という課題を解決しうるプロジェクトであると筆者は評価している。

研究室訪問シリーズの特色の一つは、連携のかたちを柔軟に変えていけるところである。その特色は当初から意識されていたわけではなく、試行錯誤の中で生まれたものではあるが、本シリーズを有益なプロジェクトにして今後も継続していくためには必須の要素であるように思われる。個人的な展望としては、大学教員のみならず、その教員のゼミ生や講義受講生を大胆に巻き込んだ展覧会企画を立ち上げてみたいと考えている。その実行に際しては新たな課題も生じてくるだろうが、関わる人々が増えた時に生まれる創造性[22]をそこに期待しているのである。もちろん、このような連携のかたちに固執する必要はなく、博物館の担当者と連携教員が連携のかたちをその都度考えていけば良いとも考えている。

多様性が重視される社会の中で真に来館者の関心に刺さる展覧会を企画するためには、博物館自身が多様性を備えていなければならない。その多様性の実践を、研究室訪問シリーズというプロジェクトにおいても、ぜひ継続していきたい。

註

1 「研究室訪問シリーズ」の「研究室」は、複数の教員・学生が在籍している講座研究室のことではない。というのも、西南学院大学博物館は講座制をとっていない文系大学であるため、ラボや講座単位での研究室は存在せず、研究室としては各教員に割り当てられた個人研究室しか基本的に存在しないからである。したがって、「研究室訪問シリーズ」の「研究室」とは、教員個人の研究室（＝教員個人の教育研究活動）のことを指す。ただし、一展覧会につき一教員の紹介と規定しているわけではなく、複数の教員について紹介することも可としている。この点については本論「２．研究室訪問シリーズの基本コンセプト」を参照。

2 博物館のカテゴリー分類は観点によって異なり、複数の分類法が存在する。たとえば「資料」の観点では、歴史博物館や考古博物館、民俗博物館、動植物園、美術館といった分類がなされているが、「博物館法における登録制度」の観点では登録博物館と博物館相当施設（さらに博物館法には明記されていないがこの二つに該当しないものとして博物館類似施設）という分類がなされている。大堀哲、水島英治共編著『新博物館学教科書　博物館学I：博物館概論＊博物館資料論』学文社、2012年では、①「法制度による分類」②「『効率博物館の設置及び運営に関する規準』による分類」③「設置者による分類」という三つの大カテゴリーが示されており、このうち大学博物館は③の観点による分類に該当するものとして位置づけられている。

3 大学博物館史については、安高啓明『歴史のなかのミュージアム：驚異の部屋から大学博物館まで』昭和堂、2014年、182-239頁を参照。

4 日本の大学博物館数に関する正確な統計データは現在のところ存在しない。しかしその概数を知るための参考資料として、伊能秀明、織田潤『日本のユニバーシティ・ミュージアム2006』『明治大学博物館調査報告』第11号所収、2006年、15-39頁と緒方泉『日本ユニバーシティ・ミュージアム総覧』昭和堂、2007年の二つが挙げられる。前者には181校281館園の情報が記載されており、後者には161大学204館へアンケート調査を実施した旨が記されている。やや古いデータではあるが、この二書の情報に鑑みると、日本には200館以上の大学博物館が存在するということになる。

5 2022年度までの現行博物館法では、大学博物館は登録博物館として申請することができなかった。この構造的問題については長年議論されており、2023年度より施行される新博物館法では登録制度の見直しが図られ、大学博物館も登録博物館として申請できるようになる予定である。

大学博物館と登録制度をめぐる問題については下記の報告書および論文を参照。公益財団法人日本博物館協会「『博物館登録制度の在り方に関する調査研究』報告書」2017年、20-21頁；佐々木奈美子、吉住磨子「博物館相当施設という選択と大学博物館」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』19（1）、2014年、217-227頁。

6 たとえば、大学博物館の特徴的なコレクションとして「学術標本」が挙げられるが、学術標本は大学の歴史のなかで絶えず無数に生産されていくものであり、すべての学術標本を無差別に大学博物館の収蔵庫・展示室へ入れるのは非現実的である。しかし保存する資料と保存しない資料を選別するにしても、明確な基準が定めづらく、判断が難しいところである。この問題については、西野嘉章『大学博物館：理念と実践と将来と』東京大学出版会、1996年、11-19頁

を参照。

7　大学博物館に限らず、博物館・ミュージアムと名乗る施設が必ずしも学芸員を雇用しなければならないわけではない。現行博物館法では、登録博物館では指定要件として「学芸員」が必須とされているが、博物館相当施設では「学芸員に相当する職員」を雇用していれば良いとされており、博物館類似施設はそもそも博物館法の中に位置を持たない施設であるため学芸員に相当する職員すら雇用する必要がない。したがって、大学が学芸員は不要と判断すれば、学芸員不在のまま大学博物館が運営されることもありうる（その実例もある）。

8　「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」は、1995年６月16日に開催された文部省学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会において報告された、当該テーマについての中間報告である。報告の全文は、西野嘉章、前掲書、177-189頁を参照。

9　安高啓明は『歴史のなかのミュージアム：驚異の部屋から大学博物館まで』において、「大学博物館は大学組織のひとつであり、その運営費は学生や保護者から納入された学費が大部分を占めている。とすれば、自ずとその対象は学生および保護者を対象とすべきであり、その次に、大学の社会貢献の理念のもと、地域住民を対象とすることになろう」と述べている（237-238頁）。活動対象の優先順位は常に難しい問題であるが、上述のように経営資源（ヒト・モノ・カネなど）の出所からその優先順位を定めるのは、明快かつ堅固な指針であると思われる。

　上記以外の大学博物館の対象・目的について論じている文献としては以下を参照。青木豊、鷹野光行共編『博物館学史研究事典』雄山閣、2017年、236-241頁（「大学附属博物館論史」の項）；亀井哲也「大学博物館の役割：Beyond “Town and Gown”」中京大学先端共同研究機構文化研究所文化科学研究所博物館研究プロジェクト編［大学教育と博物館』所収、2021年、131-162頁。

10　『西南学院大学博物館年報第14号 2021』西南学院大学博物館、2022年、40頁。

11　『西南学院大学博物館年報第11号 2018』西南学院大学博物館、2019年、43頁。

12　註10-11と同。

13　2023年２月時点での西南学院の教職員数（非常勤を除く）は、大学だけで337名、学院全体だと589名である。

14　当該リーフレットは西南学院大学博物館ホームページの「刊行物」ページよりダウンロード可能である（2018年度刊行物）。「刊行物」ページのURLは以下。
http://www.seinan-gu.ac.jp/museum/publish/index.html

15　同展覧会リーフレットより抜粋。

16　この「すべて異なる学部・学科の教員」という特色は、基本コンセプトには組み込まれていないものの、現在の努力目標として設定されているポイントであり、最終的にはすべての学部・学科を一巡することで研究室訪問シリーズは一区切りつけると筆者は考えている。ただし、本論５で述べているように、現在の状況は課題も多く、一巡できるほどプロジェクトを継続していくためには、今後も新たな連携のかたちを模索していく必要がある。

17　特別展「カタコンベ研究の世界」（会期：2019年11月11日㈪～12月７日㈯）。詳細は南山大学人類博物館ホームページの展覧会紹介ページを参照。
【特別展「カタコンベ研究の世界」】
https://rci.nanzan-u.ac.jp/museum/news/kikaku/001701.html

18　「経営資源」は、博物館の経営システムを構成する要素の一つである。具体的には「ヒト」「モノ」「カネ」といった博物館の事業を実現していくために具体的に必要となる資源のことであり、この資源を経営理念・経営戦略に基づいて適切に配するのが理想のミュージアム・マネジメントであると言える。経営理念・経営戦略・経営資源とミュージアム・マネジメントの関係については、大堀哲、水嶋英治共編著『新博物館学教科書 博物館学Ⅲ：博物館情報・メディア論＊博物館経営論』学文社、2022年、104-110頁を参照。

19　本文の主旨は、学内教員との連携展示は多額の予算がなくとも実現可能であるという意味であり、学内教員は無報酬で利用できるという意味ではない。この注意点については本論「５．研究室訪問シリーズの課題」を参照。

20　西南学院大学博物館の学芸員は１名だけであるが、その他の学芸系職員として、学芸研究員１～２名、学芸調査員（学生アルバイト）数名が雇用されている。展示のヴァリエーションを増やすための戦略として、近年は学芸研究員・学芸調査員も積極的に展示企画の立案に関わる体制を作っているところである。研究室訪問シリーズが博物館の「外のヒト」を展示企画に巻き込む戦略だとすれば、学芸研究員・学芸調査員を展示企画の主体に据える体制は「内のヒト」を展示企画に巻き込む戦略であると言える。

21　本論の研究室訪問シリーズの統計データは第１回と第２回のみ分析の対象としているが、これはコロナ禍以降の特殊な状況で開催された第３回（2020年度）と論文執筆時点で会期が始まっていない第４回（2022年度）が分析不可能であったためである。

22　東京都美術館と東京藝術大学が継続的に実施している連携プロジェクトとして「とびらプロジェクト」というものがある。このプロジェクトの発足経緯と意義について美術館担当者が解説しているコラム（稲庭彩和子「東京都美術館×東京藝術大学『とびらプロジェクト』―美術館と大学の連携が拓く実践的コミュニティの今」『博物館研究』第vol.47 No.11所収、日本博物館協会、2012年、10-13頁）において、連携が生み出す創造性について次のように言われている。「美術館と市民の関係という二項対立ではなく、美術館も大学も市民もそれぞれが役割分担をしながら、新たな創造性を誘発する人々の関わりの回路を、美術館を拠点に作っていくことを目指したいと考えている」（同書、13頁）。

　ここで言われている「関わりの回路」こそ、西南学院大学博物館が研究室訪問シリーズを通じて作り上げていくべきものであると筆者は考えている。すなわち、西南学院大学という場において、西南学院大学博物館を拠点としつつ、大学博物館・大学教員・学生の三者が連携し、それぞれが提供できるリソースを出し合って展覧会やイベントを創造するという「関わりの回路」を形成すること。それが筆者の考える研究室訪問シリーズの今後の展望である。

下園　知弥（しもぞの　ともや）　　西南学院大学博物館教員（助教・学芸員）